

青年期における差恥感情に関する研究：青年期危機との関係から

安田，郁
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/3590>

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.247-255, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

青年期における羞恥感情に関する研究

—青年期危機との関係から—

安田 郁 九州大学大学院人間環境学府

A Study of "SHUCHI" in Adolescence —The Analysis of Relations Between "SHUCHI" and Adolescent Crisis State—

Kaoru Yasuda (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purposes of this research is to arrange and classify "shuchi" (shame, shyness, embarrassment, etc.) in adolescence and study the relation between "shuchi" in adolescence and an adolescent crisis state with two sides, "standard crisis state" and "maladjustive state". "Standard crisis state" is the mental instability that everyone may experience in adolescence. "Maladjustive state" such as withdrawal and neurosis is caused by personal factor like a self weakness. According to the results of 187 college students, "shuchi" was classified into four factors, "inferior and failure", "sex and gender difference", "personal strain and embarrassment", and "self-reflection". The following four things became clear as a result of considering the relation between "shuchi" and adolescent crisis state. Being sensitive to "inferior and failure" and "personal strain and embarrassment" had affected two sides of adolescent crisis state. Being sensitive to "sex and gender difference" had only influenced the "standard crisis state". There was no relation between "self-reflection" and adolescent crisis state. "Shuchi" in adolescence was classified into four, and it became clear that the influence which each has on adolescent crisis state is not uniform.

Keywords: "shuchi", adolescent crisis state, Ego Developmental Crisis State Scale

1. 問題と目的

1. 羞恥感情について

羞恥感情は、私たちが日常的に感じる一般的な感情のひとつである。またそれは、「人類に普遍的であり、かつ人類に特有の感情」である一方で、「その表れ方や働きは極めて複雑で、文化、社会、時代と相互に作用し合いながらその様相を大きく変化させる」感情でもあり(菅原, 2002), ある文化では適切かつ当然とみなされる行為が、違う文化では恥ずかしい行為とみなされたり、ある状況ではとくに何の抵抗もなく行えることが、べつの状況では恥ずかしくてできなかつたりということが羞恥感情に関係して起こる。どのような状況でどの程度の恥ずかしさを感じるか、それがどのように表出されるかなどは個人によって大きく異なる(託摩, 1991)のも羞恥感情の特徴のひとつである。また、羞恥感情は人に基本的に備わった身近な感情であるが、ひとことで羞恥感情といっても「はにかみ」や「恥じらい」といった一時的で表層的なものから、自分の劣等性によって引き起こされるものや、自分の存在意義に関わるものまで、その感情的幅は広く、程度・内容も多種多様である。

心理的・精神的な障害や病理の研究において、羞恥感情との関係性が論じられることも少なくない。とくに赤

面恐怖や視線恐怖などの対人恐怖症は羞恥をめぐって展開される(内沼, 1977)病理とされ、羞恥感情との関係への言及が多くなされている(笠原, 1977; 清水, 1996; 鑑, 1996など)。岡野(1998)は、その対人恐怖症との関連から羞恥と自己愛の関係に注目し、自己愛性格障害を羞恥感情との関係から論じている。有光(2002)は1970年代以降の精神分析的理論では「恥が感情障害につながる」と考えられていることを指摘し、「恥が攻撃性を促進し、不安や抑うつにつながる」(有光, 2001)という調査結果を報告している。また、E. J. Anthony(1970)は、青年期に現れるうつ病の特徴のひとつとして恥の感覚が強いことをあげている。このように、羞恥感情を理解することは人の基本的な心理の理解に限らず臨床の現場においても重要な意味をもつと思われる。実際に、羞恥感情研究では何らかの形でこれら心理的な障害との関係を想定している場合が少なくない。

羞恥感情は人の発達段階の非常に早い時期から生じるとされる一方で、その内容はそれぞれの段階において変化し、その内容や程度はそれぞれの時期に特徴的であるとされる(堤, 1983)。「幼児期においてもすでに羞恥心はあるが、他人の目を敏感に意識し、しかも自己省察が鋭くなる青年期に羞恥心は一段と強くなる(託摩, 1991)」とされ、とくに青年期における心理的な問題と関連して

羞恥感情が取り上げられることは多い。このような青年期において羞恥感情は鋭敏化し、この時期に特有の様々な心的現象や心理的問題を引き起こすとされている。「恥ずかしさ」が強く意識されることが共通の特徴である。赤面恐怖や視線恐怖などが他の年代に比べてとくに多く報告されている(清水, 1996)ことから、青年期の心理を理解する上で羞恥感情の理解が重要な意味を持つことがうかがえる。

このように、羞恥感情は様々な心的現象と関わりを持ち複雑かつ多様であるが、その研究もまたバラエティーに富んでいる。しかし、それらを研究方法という視点から概観すると主観的アプローチと客観的アプローチの大きく二つに分類できるものと思われる。前者はおもに研究者の知識や経験などから主観的に羞恥感情を分類するもので、研究の数が最も多い。主観的 분류では羞恥感情は、理想と現実の自分之間にある差異を自覚することによって自らを恥じる感覚である「私恥」、所属集団により劣った評価をされることで生じる感情である「公恥」、恥じらいや困惑といった感情に代表される「羞恥」の凡そ3つに分けられており(作田, 1967; 井上, 1977; 内沼, 1983など)、その分類の基準は羞恥感情が発生するメカニズムの違いによると考えられる。また主観的アプローチの研究には、先述した対人緊張や対人恐怖症などと羞恥感情との関連を検討したものがある。しかし、これらの研究はあくまでも研究者の経験や知見に基づいて主観的になされたものであり、多くの場合実証的な検討はなされていない。また、主観的 분류による研究の多くは、どの年代の羞恥感情について論じているのかは不明である。

先行研究の第二のアプローチは、質問紙調査などの結果を統計的な手法等により処理し、客観的に羞恥感情を分類しようとするものであり、その基準はおもに羞恥感情が生じる場面の違いである。つまり、様々な羞恥感情のうち特定のものとは特定の場面・状況に結びついている(成田, 1993)という前提でその生起場面・状況ごとに羞恥感情を分類している。この手法により羞恥感情は凡そ、「自己不全感」(内面化した基準に照らし合わせたときに自らの不甲斐なさを恥じる感覚)、「かっこ悪さ」(失敗などにより生じる羞恥感情)、「異性」(異性の存在により「自」と「他」を意識することと、性に対する本能的な恥の感覚による羞恥感情)、「注視」(他人の目に晒されることによって生じる羞恥感情)、「対人困惑」(他人と相対するときを感じる緊張や不安に彩られた羞恥感情)、「性」(性的なことに対する反応としての羞恥感情)といった分類がなされている(成田ら, 1990; 菅原, 1989; 橋本, 1980など)。しかし、これらの分類はあらゆる研究に共通に現れるわけではなく、羞恥感情が十分に網羅されている単独の研究は見当たらない。これは、

それぞれの研究に用いられた質問紙がカバーしている羞恥感情の範囲がまちまちであることと、分類の最終的な段階において研究者の主観的解釈が介入することで分類の幅や数に違いが出てくるのではないだろうか。

また、客観的基準による研究では主観的 분류による研究とは違い、対象の年代を特定の発達段階に限定している場合が多いが、その年代における羞恥感情の特徴といったことについては論じていない。このことは、つまり、客観的基準によるか主観的 분류によるかに関わらず、多くの先行研究では羞恥感情を分類することに終始し、それら分類された羞恥感情の持つ違いの内容については検討されていないということである。「他人から自分の評価が低下するような判断を下される」ことで感じる羞恥と「性的な刺激を受ける」ことで感じる羞恥とは、その質や心理・行動に与える影響などには違いがあるものと思われる。とくに、羞恥感情は発達段階によってその様相が異なるとされるが、これまでの研究では対象とした年代における羞恥感情の特徴や性質について検討されることがほとんどなかった。よって、成田(1993)が指摘するように、それら分類された羞恥感情の何がどのように異なっているのかをさらに検討することが必要であろう。

以上より、羞恥感情の先行研究の問題点は、①研究対象の発達段階を考慮に入れた上で、羞恥感情を実証的に、かつ網羅的に検討した研究が少ないこと、②羞恥感情の分類に終始し、分類された羞恥感情の何がどのように異なっているのかについての検討がなされていないという2点にまとめられるだろう。

2. 青年期危機と羞恥感情について

青年期危機とは、およそ青年期という人生の移行期において心理・身体的要因により均衡が崩れ心身が不安定な状態になることを指すが、確立された定義があるわけではない。本研究では青年期危機を、①青年期に誰もが体験する可能性のある心理的な不安定状態である“標準的な危機状態”と、②そのような標準的な危機状態において自我の脆弱さといった個人的要因の存在により引き起こされる“不適応状態”(長尾, 1989; 下山, 1998)という二つの側面から捉えた。青年期において若者は不可避にある程度の心理的な不安定状態を体験するのであるが、誰もがこの時期に危機的というほどに心理的に不安定な状況に陥るわけでない。そのような危機的な状態にまでなるかどうかには様々な要因が考えられるのであり、感受性の鋭さ、内省力あるいは羞恥の感覚への敏感さといった個人的要因が(標準的な危機状態を含む)青年期危機の程度を規定するひとつの要因であることを多くの青年期心理に関する研究が指摘している(村瀬, 1976など)。このように、青年期危機と羞恥感情の関係性

はこれまでも示唆されてきており、それについて検討することで青年期における羞恥感情をより具体的に明らかできるものと思われる。しかし、そのような研究は見当らない。

3. 本研究の目的

そこで本研究では<研究1>において、先行研究で分類されている羞恥感情のカテゴリーを網羅した形で、客観的に青年期の羞恥感情を整理・分類するための「羞恥感情尺度」を作成することを目的とする。その際、先述したように、羞恥感情の研究では発達段階の違いを考慮する必要があることと、羞恥感情が青年期の心理（や病理）の理解に重要な意味をもつであろうという点に注目し、研究の対象を大学生とする。

また<研究2>では、<研究1>で作成された「羞恥感情尺度」を用いて、羞恥感情と青年期心性（青年期危機）との関係を検討することを目的とする。その際、青年期危機という概念を青年期心性のひとつの特徴的な側面を捉える指標として用い、<研究1>において整理・分類されたそれぞれの羞恥感情の青年期における特徴や性質を青年期危機との関係から検討する。羞恥感情が青年期の心理状態とどのように関係しているかを検討することで、青年期における羞恥感情の何がどのように異なっているのかをより詳しく具体的に明らかにすることができるであろう。

II. 研究 1

1. 目的

青年期の羞恥感情を整理・分類するための「羞恥感情尺度」を作成する。

2. 方法

a) 暫定項目の作成

先行研究（橋本，1980，1981；堤，1983，1988；成田，1993；樋口，2000）から引用した項目（30項目）と、3名（30歳・男性，20歳・女性，17歳・女性）に対して行った聞き取り調査をもとにして自作した項目（11項目）の計41の質問項目を作成した。項目の選択は先行研究で用いられた基準を参考とし、「性」，「注視」，「劣等感」，「非難」，「対人緊張」，「露見」，「異性」，「不注意な行動」，「思い違い」，「ばつが悪さ」，「知識・能力の不足」，「自己不全感」，「不適当行為」，「道徳的逸脱」，「照れ」，「公表場面」，「孤立」，「格好悪さ」，「無様な行為」，「きまり悪さ」，「対人困惑」，「公恥」，「私恥」，「自己否定感」，「基本的恥」，「自責的萎縮」，「いたたまれなさ」，「はにかみ・もどかしさ」によった。41項目からなる「羞恥感情尺度」の暫定版を、心理学を専攻する大学院生8名に

提示し、羞恥感情を感じる場面として不適当な内容の項目の有無を訊ねた結果、とくに不適当と指摘された項目はなかった。全41項目を本調査のための「羞恥感情尺度」（暫定版）の項目として採用した。これらの質問項目は客観的手法による先行研究に倣い、被験者に対して羞恥感情を生起する場面を提示する内容となっている。

b) 調査の実施

A県内の大学生203名（男子86名，女子114名，不明3名，平均年齢20.3歳）を対象とし，2002年11月中旬から12月中旬に大学の講義の前後に調査を行った。「青年期の意識に関するアンケート」という名称の質問紙を配布し，その中の「質問I」として「羞恥感情尺度」（暫定版）の41項目について「質問項目に示されている状況・場面に自分がいるとするとき，どれくらいの恥ずかしさを感じるかについて」答えてもらうように教示した。回答は4件法（「1＝まったく恥ずかしくない」から「4＝とても恥ずかしい」。2と3にはとくに恥ずかしさの程度を示す言葉は記載せず，目盛のみを標した）とし，羞恥感情に敏感であるほど素点の合計得点が高くなるように得点化した。

3. 結果

回収した203名分のうち，記入洩れなどのあった16名分を除外した187名分の「羞恥感情尺度」（暫定版）の評定値に対してパソコンの統計ソフト SPSS を用いて因子分析を行った。データの内訳は男子80名（平均年齢20.9歳，SD=1.3），女子107名（平均年齢19.8，SD=1.4）全体の平均年齢20.3歳。

a) 因子分析の施行

固有値1で因子の抽出を行ったところ，因子4と5の固有値に大きな差が見られた。そこで，確認のために探索的に5因子から8因子を抽出する設定で因子分析を行ったところ，5因子目以降の因子によって説明される項目の数は少なく，また因子の解釈も困難になったため，5因子以上を抽出する利点はないものと判断し4因子を採用した。以上より，「羞恥感情尺度」の187名のデータに対して4因子を抽出する設定で主成分分析（バリマックス回転）を行い，その結果から因子負荷量が.45を超えず，かつ共通性が.3を超えない10項目を削除し，再度主成分分析を行った。その結果，さらに因子の内容に合わない3項目を削除して主成分分析を行ったところ，全項目の因子負荷量が.48を超えたため，最終的に4因子28項目を「羞恥感情尺度」の下位項目として採用した（Table 1）。4因子での累積寄与率は45.703%であった。

第1因子の項目の内容は，人前で注意されたり欠点や能力不足などが露見したりして劣等な評価をされること（項目6，21，24，39）と，不注意などによって失敗してしまうこと（項目4，5，19，25，27，37，38）に関係している

Table 1
羞恥感情尺度の因子分析結果 (主成分法・バリマックス回転)

下位 尺度	項目内容	因子負荷量			
		F1	F2	F3	F4
劣等・失敗	24. 人前で叱られたり注意されたりする	0.685	0.121	0.137	0.233
	38. 気が付いたら自分だけ違うことをしている	0.613	0.090	0.090	0.194
	5. 人通りの多いところで転ぶ	0.587	0.110	-0.050	-0.030
	25. 人前で場違いなことを言うてしまう	0.570	0.186	0.123	0.275
	27. 自分の体格/スタイルや格好が他人より劣っていることに気づく	0.568	0.133	0.137	0.010
	21. 自分の能力が他人より劣っていることをひとに知られる	0.552	0.083	0.236	-0.004
	37. 服のファスナーが開いているのに気がつく	0.540	0.158	-0.213	0.129
	39. 自分の欠点や弱点を指摘される	0.534	0.168	0.347	0.134
	6. 授業中にあてられた質問に答えられない	0.500	0.121	0.217	0.281
	19. 人前でオナラをしてしまう	0.491	0.152	-0.103	-0.084
4. 間違えて知らない人に声をかける	0.483	-0.159	0.247	0.013	
信頼性係数		$\alpha = .8195$			
性・異性	7. 街でキスをしているのを見かける	0.025	0.726	-0.060	0.048
	31. 街でヌードのポスターを見かける	0.088	0.701	0.101	0.168
	15. 他人とセックスに関する話をする	0.206	0.671	0.243	0.047
	32. 異性と二人きりで話をする	0.048	0.572	0.348	0.079
	28. 着替えているところを人に見られる	0.300	0.536	-0.010	0.132
18. 異性からじっと見つめられる	0.242	0.497	0.178	0.048	
信頼性係数		$\alpha = .7524$			
対人緊張・困惑	20. 初対面の人と会って話をする	0.222	0.162	0.739	0.038
	9. 知らない人に道を尋ねる	0.050	0.167	0.692	0.065
	16. 目上の人と一対一で話をする	0.027	0.183	0.665	0.217
	35. 店員に探しものを尋ねる	-0.220	0.133	0.653	0.093
	2. 自己紹介をする	0.230	-0.040	0.524	-0.080
1. 人の大勢いる部屋にひとりで入っていく	0.323	-0.010	0.523	-0.090	
信頼性係数		$\alpha = .7572$			
自己内省	30. 約束を破る	0.104	-0.050	-0.030	0.801
	29. やるべきことがあるのに怠けてしまう	0.011	0.149	0.080	0.754
	33. 人にウソをつく	0.063	0.192	0.006	0.701
	14. 規則を破る	0.105	0.348	0.082	0.597
34. 自分の手伝いが役に立たなかったことに気がつく	0.392	-0.110	0.080	0.548	
信頼性係数		$\alpha = .7553$			
寄与率(%)		14.58	10.15	11.03	9.935

と考えられる。後者は、必ずしも直接に特定の誰かから劣等な評価を下されるとは限らないが、行為の主体はそのような評価を強く意識することが考えられる。つまり、第1因子は、能力的な劣等性によって劣等な評価をされることと、能力の有無とは関係なく失敗そのものによって劣等な評価が下される可能性を意識することで引き起こされる羞恥感情といえる。よって、「劣等・失敗」因

子と命名した。第2因子の項目は、全体として性的要素が基礎としてありつつ、異性との関係性も内容に含まれている(項目15, 18, 28, 32)と考えられる。とくに項目18や32は、直接的な性(sex)的要素よりは、性別(gender)の違いによる要素が大きいと考えられるので、第2因子を「性・異性」因子と命名した。第3因子の項目は、対人場面に関連した内容から構成されており、そ

それぞれの対人場面は対峙する人の数や関係性（相手の立場が自分より上か下か、既知の関係かどうかなど）は異なるものの、他人との接触において緊張や困惑することと関係している点が共通している。よって「対人緊張・困惑」因子と命名した。第4因子の項目の内容は、自らの行いを省みて自己嫌悪に陥ったり自己不全感を感じたりすることに関係していると考えられる。規則や約束を破ったり（項目14, 30）、ウソをついたりする（項目30）行為は、基本的に他人にそのことが露見しないことを前提として（少なくともそれを期待して）行われることであり、よって他者からの直接的な評価を前提としていない。また、自分が怠けていたり、役に立たなかったことに気づいたりすることで恥ずかしくなるのは、他者からの評価よりは内省することで内在化された価値基準に照らすことにより引き起こされると考えられる。よって第4因子を「自己内省」因子と命名した。以上の結果から、「羞恥感情尺度」を28項目、4因子で決定した。

b) 信頼性の検討

各因子を構成する項目の信頼性をクロンバックの α 係数で検討した結果、第1因子が.8195、第2因子が.7524、第3因子が.7572、第4因子が.7553であった。

4. 考察

青年期の羞恥感情が「劣等・失敗」、「性・異性」、「対人緊張・困惑」、「自己内省」の4つの因子によって分類されることが示唆された。

先行研究と比較すると、「劣等・失敗」羞恥感情が「否定的な自己像が他者に露呈してしまう」場面で生起する（成田, 1993）点が主観的研究における「公恥」（井上, 1977）と共通しており、これに近い分類であるといえる。また、この羞恥感情は客観的研究において、何らかの失敗や思い違いなどにより生じる羞恥感情とされる「かっこ悪さ」にも近い分類である。これらの「公恥」や「かっこ悪さ」といった分類は多くの先行研究でも見られるものであり、本研究でも同様の結果がえられたということは、自分の劣等性や失敗が露見することが青年期においても羞恥感情を規定する重要な要素であるということを示しているといえるだろう。

性的な羞恥感情は、先行研究によっては独立したものとして現れない（あるいは「羞恥」というカテゴリーに他の要素と共に一体化して現れる）分類であるが、本研究では「性・異性」として現れた。青年期の若者が性や異性に関する刺激に対して他の羞恥反応とは異なった反応を示すということと考えられる。これは青年期において特徴的な反応であるかもしれない。また、橋本（1980）の研究では「性」と「異性」がそれぞれ独立したカテゴリーとして現れているが、本研究ではそのような現れ方はなかった。これは、青年期では性的刺激と異性に関する

刺激に対して類似の反応をすることの現れと考えられる。

「対人緊張・困惑」羞恥感情は、先行研究において「羞恥」と分類される羞恥感情に近く、特に何らかの劣等性が露見したり評価が下されるわけでもなく、単に他人の存在により自と他の差異が露見したり自覚されたりするときに感じる「恥」の感覚であって、必ずしも劣等であることは問題にならないとされる（井上, 1969, 1977; 樋口, 2000）点が特徴である。客観的研究において、おもに単独の他人と相対するときに感じる緊張や不安に彩られた羞恥感情であるとされる「対人困惑」に類似し、いわゆる「気恥ずかしさ」「きまり悪さ」といった感情と考えられる。

以上3つに分類された羞恥感情は、他人の存在や視線が意識される点や「自」と「他」の違いが意識される点で、他人の（実際のあるいは想像上の）存在が前提となっていることが共通している。一方、「自己内省」羞恥感情は、自己省察することで自分の至らなさに思い至ることを感じる羞恥であり、他者との比較や他者からの視線がその生起に直接に関係しない。これは主観的研究で「私恥」と分類される羞恥感情に近く、「理想的自己像と現実自己像との食い違いから自己の劣等性に気づくもので、他者との比較から劣等性を自覚するものではない」（井上, 1977）のであり、同様に劣等性が関係すると考えられる「劣等・失敗」羞恥感情とは生起の仕方が対照的である。「自己内省」羞恥感情の存在は、青年期の若者は外的な評価を意識するだけでなく、自らの行為を評価するための価値基準を内在化していることの現れと考えられる。

III. 研究 2

1. 目的

研究1で作成された「羞恥感情尺度」を用いて、羞恥感情と青年期心性（青年期危機）との関係を検討する。

2. 方法

a) 測定尺度

本研究では、青年期危機の程度を測定するために長尾（1989）の青年期の自我発達上の危機状態尺度（A水準・B水準）（ECS; Ego Developmental Crisis State Scale）（以下ECSとする）を用いる。この尺度は、「危機」を「児童期までとは異なった心理状態が生じる発達上の『転換期』という意味と、社会適応の観点から、不適応状態や精神医学的疾患に陥りやすい『危険な状態』という2つの意味」で捉えている。その上で、「転換期」としての青年期に特有のあらゆる心的葛藤が露呈しやすい状態（標準的な危機状態）の程度と、そのような状態において、おもに自我の強度などの個人的要因によって不

適応状態を呈する程度を、それぞれ A 水準と B 水準によって測定する尺度である。このように A 水準によって測定される「標準的な危機状態」と B 水準によって測定される個人に特異的に現れる「不適応状態」をそれぞれ分けて定義しているのは、「前者と後者の危機状態は因果関係をもつものの、その個人の置かれた状況や自我の強さによって、前者の危機状態にあっても後者の危機状態に陥らない者もある（長尾，1989）」と考えられるからである。この ECS を構成している青年期危機観は、下山（1998）が「思春期・青年期の心理的危機としては、子どもから大人への正常な移行過程で生じる標準的危機と、病理の発現としての病理的危機の両面を考慮する必要がある」と指摘していることと共通しており、ECS により青年期に特有な心理状態のひとつの側面である青年期危機状態を捉えられるものと思われる。

b) 調査の実施

調査は研究 1 と同時に同じ対象に対して行われた。研究 1 で行った調査で用いた「青年期の意識に関するアンケート」の「質問Ⅱ」と「質問Ⅲ」として「青年期の自我発達上の危機状態尺度」の A 水準と B 水準をそれぞれ割り当てて試行した。得点はオリジナル通りに A 水準を 5 件法（5 = 全くその通りである，4 = どちらかといえばそうである，3 = どちらともいえない，2 = どちらかといえばそうでない，1 = 全くそうでない），B 水準を 3 件法（3 = はい，2 = わからない，1 = いいえ）とした。

3. 結果と考察

研究 1 と同時に実施された調査において回収された 203 名分の質問紙のうち，記入洩れなどにより 16 名分を除外した 187 名分の「羞恥感情尺度」と ECS の評定値を分析に用いた。「羞恥感情尺度」の各下位尺度得点を算出し，その平均以上と未満をそれぞれ「劣等・失敗」，「性・異性」，「対人緊張・困惑」，「自己内省」の Hi 群と Lo

群とした上で，それぞれの群の ECS の A 水準と B 水準の得点を算出した（Table 2 と Table 3）。そして，「羞恥感情尺度」の各下位尺度得点の Hi 群と Lo 群を独立変数とし，ECS の A 水準と B 水準の得点をそれぞれ従属変数とした t 検定を行った。

1) 「劣等・失敗」羞恥感情と青年期危機の関係

ECS の A 水準の得点 ($t=3.73$, $df=185$, $p<.001$, 両側)，B 水準の得点 ($t=3.21$, $df=185$, $p<.01$, 両側) とともに 2 群間に有意差が認められた。「劣等・失敗」羞恥感情に敏感なほど心理的・精神的に不安定であり，また不適応状態にある可能性も高いといえる。「劣等・失敗」羞恥感情は，おもに他人から劣等な評価を下される（あるいはその可能性がある）ことによって生じる反応であると考えられる。このように他人から劣ったものとして見られるということは外的な強い負の刺激であり，それゆえに心理的な不安定と不適応という 2 つの側面において青年期危機の程度に関係するものと思われる。本研究の対象である大学生は青年期の後期にあたるが，この時期は自己像や独自の価値観が安定してくる時期であり，失敗などをして劣等な評価を下されることにもそれなりの耐性を持つようになると考えられる。しかし，逆にこの時期に他人から劣ったものとして見られることに対し羞恥という反応を示すことは，心理的安定と不適応状態に関係する個人的要因となる可能性が考えられる。

Table 2
羞恥感情尺度の平均得点

劣等・失敗	性・異性	対人緊張・困惑	自己内省
33.88 (5.26)	13.58 (3.63)	13.36 (3.48)	12.57 (3.03)

() 内は標準偏差 N=187

Table 3
羞恥感情尺度の各下位尺度得点の Hi・Lo 群における ECS の A・B 水準得点の平均値と標準偏差

	劣等・失敗		性・異性		対人緊張・困惑		自己内省	
	Hi (n=107)	Lo (n=80)	Hi (n=101)	Lo (n=86)	Hi (n=83)	Lo (n=104)	Hi (n=97)	Lo (n=90)
ECS								
A 水準	84.51 (12.21)	77.56 (13.12)	83.73 (11.8)	78.79 (13.99)	86.17 (11.21)	77.85 (13.27)	82.35 (13.32)	80.67 (12.75)
B 水準	43.74 (7.8)	40.09 (7.56)	43.15 (7.76)	41.03 (7.93)	43.98 (7.87)	40.74 (7.64)	42.34 (8.15)	42 (7.64)

() 内は標準偏差

2) 「性・異性」羞恥感情と青年期危機の関係

ECSのA水準で2群間に有意差が認められ ($t=2.53$, $df=185$, $p<.05$, 両側), B水準の2群間の差は有意傾向 ($t=1.84$, $df=185$, $p<.10$) であった。「性・異性」羞恥感情に敏感なほど心理的・精神的に不安定であり, 不適応状態にある傾向が認められた。ある程度の年齢以上になると, 程度の差こそあれ, 「性・異性」に関する刺激には何らかの恥ずかしさを感じるものである。これは, 性的なことが人に本来的に備わった属性であり, それが男女という形で誰に対しても「自」と「他」の違いを強く感じさせるからではないだろうか。「自」と「他」を意識し, その間にズレを感じるものが羞恥感情の基本的な意識のあり方であり (内沼, 1977), 「性・異性羞恥感情は人に基本的に見られる感情であるといえるだろう。とくに「自」と「他」に対する意識が高まる青年期においては, 「性・異性」羞恥感情への敏感さが心理的な不安定さとして現れるのではないだろうか。また一方で, 性的な刺激に恥ずかしいという反応をしやすほど神経症やひきこもりといった不適応状態にある傾向が示された。性的な刺激に羞恥感情を抱くことはある程度当然のことであり, そのような反応が社会的にも受け入れられやすいということが, 「性・異性」羞恥感情が心理的不安定さの程度とは明確に関係している一方で, 不適応状態の程度とは関係する傾向があるという現れ方として違いが出たのではないだろうか。また, 大学生が属する青年期後期は, 身体的な発達とはほぼ安定した状態に入っており, 身体的「性」の受け容れも安定しつつあり, 異性との関係もそれまでに比べ安定したものになる時期であると考えられる。このような身体的な安定も, 「性・異性」羞恥感情が心理的不安定とは関係しても不適応とはその関係性が明確に現れなかった理由のひとつではないだろうか。

3) 「対人緊張・困惑」羞恥感情と青年期危機の関係

ECSのA水準 ($t=4.561$, $df=185$, $p<.001$, 両側), B水準 ($t=2.839$, $df=185$, $p<.01$, 両側) ともに2群間に有意差が認められた。「対人緊張・困惑」羞恥感情を感じやすい者ほど, 青年期において心理的・精神的に不安定であり, 不適応状態にある可能性も高いといえる。「対人緊張・困惑」羞恥感情は, 他人の目が意識されるという点で「劣等・失敗」と共通するが, その生起においてとくに何らかの(劣等な)評価を下されることは前提とならない。それゆえに「劣等・失敗」よりも「目」という要因がより強く影響すると考えられる。つまり「対人緊張・困惑」羞恥感情は, おもに他人から見られることによって生じる。これは, 釜(1996)の言う, 特定の行動とは関係なく自己が剥き出しになって自己全体を晒す体験による, 羞恥の基本的な形態である。このように, 対人場面での羞恥感情は羞恥の本質的な性質を備えたもの

であり, そのことが青年期の心理的安定(不安定)と適応(不適応)の両面に影響しているのかもしれない。

また, 他人の目が気になるのは青年期の特徴で, 赤面恐怖, 視線恐怖などはこの時期に特徴的に見られる症状であり, 青年期が非常に他人の「目」が気になる時期であるということを示唆している。「対人緊張・困惑」羞恥感情が心理的安定や不適応に影響を及ぼしているということは, このような傾向が青年期においても強く見られるということを示していると考えられる。

4) 「自己内省」羞恥感情と青年期危機の関係

ECSのA水準, B水準ともに2群間に有意差は認められなかった。「自己内省」羞恥感情の程度の違いは, 青年期における心理的な不安定さやその結果としての不適応状態とは関係しないものと思われる。「自己内省」羞恥感情は自己省察することによって生じる点で, 他の3つの羞恥感情と異なる。つまり, 他の3つの羞恥感情はおもに外からの何らかの刺激を契機として生じるが, 「自己内省」羞恥感情は特に外からの刺激を受けることなく生じる点で, 精神内界における葛藤であるといえる。「自己内省」羞恥感情が青年期危機の程度に影響を与えないという結果は, 「青年期の自我発達上の危機状態に陥り, 不適応状態を示す青年にとっては精神内界における葛藤よりも……ライフイベントが大きく影響を及ぼしている」という長尾(1999)の指摘と一致する。

IV. 総合考察

1. 「羞恥感情尺度」の因子分析による羞恥感情の分類について

全体的に先行研究と共通する部分が多く見られる結果となった。特に主観的研究における分類である「公恥」「羞恥」「私恥」のそれぞれに対応する「失敗・劣等」「対人緊張・困惑」「自己内省」という分類が現れた点が共通していた。主観的に論じられてきた羞恥感情の分類が本研究で確認される結果となった。また, 「性・異性」というカテゴリーが分類された点が本研究の特徴ではないだろうか。青年期において性的な刺激に対する反応としての羞恥感情が他の羞恥感情と違った性質をもつことの現れであろう。先行研究において「他人の目に晒される(可能性がある)ことによって生じる羞恥感情」と分類される「注視」は, 本研究では単独の羞恥感情としては現れず, 「劣等・失敗」羞恥感情と「対人緊張・困惑」羞恥感情に取り込まれるかたちで現れた。青年期における羞恥感情にとって他人に見られるということがひとつの基礎的な要素であると考えられる。一方で, 「自己内省」羞恥感情は他人の視線や評価によってではなく, 内省することにより自らの行いを恥じることによる羞恥感情であり, 青年期の若者が社会的・道徳的な価値観・基

準を十分に内在化していることの表れではないだろうか。

2. 羞恥感情と青年期危機との関係について

「劣等・失敗」羞恥感情と「対人緊張・困惑」羞恥感情という、他人の視線や評価が関係する刺激に対する羞恥感情を示すということが、青年期において特徴的に見られる心理的な不安定と不適応の程度と関係することが示唆された。「自」と「他」を違うものとして強く意識し、その両者の間にズレを感じるものが羞恥感情を引き起こす最も基本的な意識のあり方で(内沼, 1977), 青年期はこのような「自」と「他」の意識に強く影響される時期である。このような時期において他人から見られ評価されることに対して羞恥反応を示すことは、心理的に大きな影響力をもち青年期危機の程度を規定する要因となりうるのではないだろうか。一方で、「自己内省」羞恥感情に対する反応の程度が青年期危機の程度に関係していないという結果は、他人の存在を前提としない羞恥に敏感であるかどうかということが、心理的な不安定や不適応の程度に影響しないということを示唆している点で、前者と対照的である。村瀬(1976)は青年期危機の程度を規定する要因として、感受性の鋭さと内省力の豊かさをあげている。つまり、感受性が鋭く内省力が豊かであるほど緊張や葛藤を抱きやすく、青年期の様々な課題への対応が困難になり、より心理的に不安定な状態に陥りやすい可能性があるということであるが、本研究では少なくとも内省によって羞恥感情を抱きやすいかどうかは青年期危機の程度と関係していないということが示唆された。

3. 今後の課題

今回の研究では、羞恥感情を分類する過程において性別の違いについて検討できなかった。何に対してどれくらい羞恥を感じるかは、男女で違うことが考えられ、羞恥感情を分類する段階で性別ごとに分析することにより男女で違った羞恥感情の分類になっていた可能性も考えられる。その場合、羞恥感情と青年期危機の関係も、男女で違ったものになったかもしれない。また、今回の研究では対象を大学生としたが、大学生だけで青年期の羞恥感情について十分に検討できたとは言えない。今後、他の世代の羞恥感情についても比較検討していく必要があるだろう。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授野島一彦先生、同教授吉良安之先生に心よりお礼を申し上げます。

引用文献

- Anthony, E. J. 1970 Two contrasting types of adolescent depression and their treatment. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **18**, 841-895.
- 有光興記 2001 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係 性
格心理学研究, **9**, 71-86.
- 有光興記 2002 恥と罪悪感 教育と医学, **50**(8) 特集・
恥について考える 慶応義塾大学出版会 Pp.732-
739.
- 橋本恵以子 1980 大学生の羞恥感情の因子分析(その
1) 第44回日本心理学会発表論文集, 389.
- 橋本恵以子 1981 因子分析による羞恥感情構造の発達
的研究(2) 第45回日本心理学会発表論文集, 384.
- 樋口匡貴 2000 恥の構造に関する研究 社会心理学研
究, **16**(2), 103-113.
- 井上忠司 1969 主体の内的側面から見た恥と罪—そ
の社会心理学的構造— ソシオロジ, **49**, 113-124.
- 井上忠司 1977 「世間体」の構造—社会心理史への試
み— 日本放送出版協会
- 笠原 嘉 1977 青年期—精神病理学から— 中公新
書
- 村瀬孝雄 1976 青年期危機概念をめぐる実証的考察
笠原 嘉他編 青年の精神病理 弘文堂 Pp.29-52.
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の
作成の試み 教育心理学研究, **37**(1), 71-77.
- 長尾 博 1999 青年期の自我発達上の危機状態に影響
を及ぼす要因 教育心理学研究, **47**(2), 141-149.
- 成田健一・寺崎正治・新浜邦夫 1990 人文論究(関西
学院大学人文学会), **40**(1), 73-92.
- 成田健一 1993 共分散構造分析による羞恥感情を引き
起こす状況を構造 東京学芸大学紀要 第1部門,
44, 191-204.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖
から差別論まで— 岩崎学術出版社
- 清水将之 1996 思春期のころ 日本放送出版協会
- 下山晴彦 1998 発達と臨床援助の心理学 下山晴彦編
教育心理学 東京大学出版会
- 菅原健介 1989 対人的不安の類型化に関する研究 東
京都立大学人文学報, **205**, 91-107.
- 菅原健介 2002 恥について考える 教育と医学 **50**(8)
特集・恥について考える 慶応義塾大学出版会
Pp.664-671.
- 託摩武俊 1991 青年の心理 改訂版 培風館
- 鐘幹八郎 1996 恥の感覚について 北山修 編 日本
語臨床1「恥」 星和書店
- 堤 雅雄 1983 羞恥論への予備的考察 島根大学教育
学部紀要(人文社会科学), **17**, 1-7.

- 堤 雅雄 1988 羞恥傾性と自己意識—後期青年期における一検証— 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), **23**(2), 19-28.
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学—恥・罪・善悪の彼岸— 弘文堂
- 内沼幸雄 1983 羞恥の構造 紀の国屋書店